30

『千金方』に見られる唐以前諸家灸法について

吉岡広記

『千金方』に見られる鍼灸施術の傾向は、鍼法よりもむしろ灸法が主体であるという点にあるが、その壯数記載より大きく二つの系統に分類することができる。一つは、『甲乙経』以来の伝統的な一・三・五・七・九という奇数（陽数）で統一された「明堂系灸法」とも称すべき「少壯」のものである。そこには、「陽気を補う」という陰陽論的要素を土台として設定がなされているという特徴がある。もう一つは、前者に対し「唐以前諸家灸法」とも称すべき十壯を超える「多壯」のものである。この「多壯」は、その壯数よりさらに細分化することが可能で、十の倍数（十壯・三十壯・五十壯など）・百の倍数（百壯・三百壯・五百壯など）・七の倍数（二七壯・三七壯など）・随年壯といったものが挙げられる。これらは、奇数を約数に持つ数であり、「少壯」同様に陰陽論的要素が根底にある。本書の巻二十九・灸例第六に孫思邈の時代には様々な灸法が存在していたという指摘があり、「多壯」を子細に見ていくと唐以前の灸法の実態をある程度知ることができる。

施灸指示のある孔穴・部位の総数は九六一箇所（双穴は単穴同様に一穴として計算した）に及ぶが、その内訳は「少壯」四六三箇所・「多壯」四九八箇所とほぼ同じ割合で所出する。「多壯」における施灸部位（巻二十九・明堂三人図の孔穴分類の部位名称を参考とした）の分布は、腹（胸・側脇を含む）一五七穴・脊中（肩を含む・背全体のこと）一二〇穴・足一一七穴・手四三穴とこれら四部位が全体の約八割を占めている。腹・足の二部位は、「腹⇕背・足⇕手」という角度から陰陽分類をすると、いずれも「陰」部となる。これは、蔵府の虚（陰虚）を補うために、より「蔵（陰）」と親和性の高い腹・足を治療部位として用いるという意図の表れであると考えられる。また、これらとは逆に背・手の二部位は、『素問』陰陽応象大論篇第五の「以右治左。以左治右」という一節に

見られるような陰陽論を土台にしていると考えられる。

ところで、これら四部位は輸募穴および手足の要穴のある重要な部位でもある。その要穴の内訳を見ると、募穴（腹）五二穴・背部輸穴五五穴・手の経脈二〇穴（うち要穴一一穴）・足の経脈六五穴（うち要穴四九穴）となっている。これら要穴における蔵府との関係性を見ると、肝・脾・肺・腎・胃・大腸・小腸が安定して使用されている。そのほか、心（小腸）と心主（三焦）の扱い方に特徴が見られる。経脈の選定は、『霊枢』邪客篇（「心者。五蔵六府之大主也。精神之所舎也。其蔵堅固。邪弗能容也。容之則心傷。心傷則神去。神去則死矣。故諸邪之在於心者。皆在於心之包絡。包絡者。心主之脈也」）に見られる心は傷害されないという認識に基づき、手少陰心経（手太陽小腸経）ではなく手厥陰心主経（手少陽三焦経）となっている。それに対し、輸募穴の選定は、本書において心主に配当される孔穴がないことから、心の配当される「巨闕」と「心輸」が用いられている。要穴の使用頻度は、各部位に差はあるものの全体としては約五割（一六七穴）を占めており、施灸部位（孔穴）の選択には要穴（五蔵・経脈）がある程度重視されていることが伺われる。要穴という観点から施灸部位を見ると、「手足（経脈・陽）⇕腹・背（蔵・陰）」という先の陰陽分類とは別の角度から認識がなされていることがわかる。とはいえ、「陰（蔵）」の治療を、その「陰」とより親和性の高い「陽（外）」部の「陰」部を用いるか、逆に「以右治左。以左治右」に代表されるような「陽（外）」部のより「陽」部を用いるという点においては一貫している。

以上より、施灸部位の選択には、その大部分において陰陽論が土台となっていることが判明した。「唐以前諸家灸法」（「多壮」）の特徴は、壮数記載に相違があるにせよ、「陰虚（蔵虚）」の重視という点にある。

（日本鍼灸研究会）